

かぶかと切付たふる、處をた、みかけて切たりしかば、立もあからず死したりけり、源藏乗か
かり刺貫てと、めをさし、従者をば追はらひつ、兄弟は初赤堀が父を打たりしより、仇を報ゆる
次第しるし置たるを、常に各一通帯の中へ入たりしを取出し、赤堀が袴にはさみけり、略中岐會
路より、江戸に趣き、五月廿六日、町奉行保田越前守のもとに行て、仇討たる由を申せば、尋問る、
事ども有て、越前守自出て、兄弟に始終詳に聞いたはらる、事大かたならず、饗膳給はりて、それ
より松前伊豆守のもとに至りしに、過にし年逢たりし、人々出て悦びあへり、青山の藝州の屋敷
に往て、石井清大夫がもとにあり、青山下野守の嫡子筑後守此由を聞、即使を以て兄弟を引とら
れけり、其後下野守の領地、其比濱松なりしかば、遠州に至り、兄弟ともに寵せられ、源藏後重き職
を命せられけり、

〔一話一言 四十二〕宮城野忍報讎の實説 仙臺より尋參候敵討之事

松平陸奥守様御家老、片倉小十郎殿知行所之内、足立村百姓四郎左衛門と申者去る享保三戌年、
白石と申所にて、小十郎殿、劔術之師に田邊志摩と申、知行千石取候仁在之候に行逢、路次之供廻
りを破り候とて及口論、彼四郎左衛門を志摩打捨被申候、此節四郎左衛門に貳人之女子あり、姉
十一歳、妹八歳、早速に領内を立退、仙臺に致仕居罷在候而、陸奥守様劔術之師に、瀧本傳八郎殿と
申方へ、兄弟共に奉公に罷出、忍びくゝに劔術を見習、六ヶ年之間、劔術致修練候、或時女部屋に、木
刀之聲頻に聞へ申候間、傳八郎不審に被存、伺見られ候處、右之二女、劔術稽古仕候様子に候、傳八
郎子細を尋被申候得ば、報讎之心入之由物語申候に付、傳八郎感心不淺、此を彌以修行致させ、密
密に秘傳申聞され候由、高千石今度御加増二千石瀧本傳八郎名を土佐と改む、右之次第は、當春
陸奥守様へ、彼貳人の女が寸志を遂させ度と、御願被申上候に付、右敵田邊志摩と御引合、仙臺之
内白鳥大明神の社前宮の叶と申處に、矢來を結び、當卯享保八年之三月、雙方立合勝負被仰付候、仙